

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	岡田 聡
論文題目	精神医学から哲学へいたるヤスパースの思索全体と根本態度
<p>審査要旨</p> <p>上記論文は三部構成で、</p> <p>第1部 実存と超越者の近さの中の遠さ(第1章「形式的超越と暗号解読」、補論「暗号解読と交わり」、第2章「挫折と超越」、第3章「実存と超越者の相即性」)</p> <p>第2部 ヤスパースとキリスト教の近さの中の遠さ(第1章「ヤスパースと20世紀前半を生きたキリスト教神学者との同時代的共通性」、第2章「ヤスパースの聖書の転回とキリスト教」、第3章「ヤスパースと3人の神学者」)</p> <p>第3部 ヤスパースの根本態度(第1章「精神医学期の根本態度」、第2章「精神医学から哲学へ」)</p> <p>結語</p> <p>という内容になっている(各章内で分けられる節のタイトルは省略する)。</p> <p>全体の趣旨は、論文の題目に端的に示されているように、精神医学から哲学に至るヤスパースの思索全体を貫く根本態度を明らかにして、統一的なヤスパース理解を得ようとする事、あるいは少なくとも統一的理解のための基本的視野を確定しようとする事であると言ってよいであろう。</p> <p>ヤスパースが実存哲学の第一人者であることは言うまでもないが、彼は初めは精神医学者、より具体的には精神病理学者として出発し、その分野でも大きな業績を残したことはよく知られている。さてそこで、われわれがヤスパースを研究する上での大きな問題は、精神医学と哲学という二つの分野の間をどのように関連づけるかということである。従来の研究者たちの態度がどうであるかと言えば、一般に、精神医学者たちは哲学に転じたヤスパースに距離を置き、ヤスパース哲学研究者たちは『哲学』(1932)以前のヤスパースにあまり関心をもたなくなっているというのが実情だと思われる。個別的に例外はあるとしても、全般的にはそういう傾向が明らかにあると言えよう。しかしこのことは、ヤスパース研究としては不十分な、克服されるべき状況だと言わざるをえない。なぜなら、精神病理学も哲学も、ヤスパースという同じ一個の人格がなしている真摯な営みであるからである。精神医学の中にのちのヤスパースの哲学が萌芽的に伏在しているのであり、また逆に、哲学の中に先立つ精神医学が背景として生きているというのが、妥当な見方である。岡田氏の問題意識はまさにその点に集中している。ヤスパースの人間研究と真理の探究が両分野において無関係であるわけがなく、むしろ根底においてある一貫した根本態度があるはずだということである。そういう見地から、岡田氏は精神医学と哲学を通じてヤスパースの思索全体に確かな連続性があるということ、綿密な文献的精査と諸研究の成果とに依拠しつつ明らかにしようと試みている。</p> <p>ちなみに、ヤスパース自身が、初めは両分野をはっきりと区別していたのだが、1946年の『精神病理学総論』第四版に至って精神病理学の中に自覚的に哲学の要素を導入している。このことからしてもヤスパースの思索全体を連続的・統一的に見ようとする岡田氏の研究姿勢は当然要請されるべき必然性をもつものである。</p> <p>もちろん、限られた紙幅の範囲内でヤスパースの膨大な書著を網羅的に論ずることは困難、というよりも不可能であるから、岡田氏は、真理に近づいていく多様な道筋の考察という方法論的な面に焦点を合わせて、選ばれた特徴的な主題に即して議論を展開する。結論部で言われているように、meta-hodos(道に沿って)という意味での Methode(方法)としての Auf-dem-Wege-sein(途上にあること)が真理探求のあり方であるわけである。それは言い換えれば「絶対化の否定」であり、絶対化を廃して限りなく真理に近づいていくことである。</p> <p>その考察の準備段階として、序論と言うべき第1部で、究極的存在である超越者(宗教的に言えば神)への</p>	

氏名 岡田 聡

実存の接近の諸相が近さと遠さという観点から論じられる。これはヤスパース形而上学の最深部において本論文の主題を先鋭的に浮き上がらせる意図をもってなされていると言えよう。近さと遠さとは、暗号(象徴)において超越者は近きものとして経験されるが超越者そのものは彼方の遠きものであり続けるということである。この近さと遠さとの両極的緊張が他の次元でもヤスパースの思考法の特徴をなしており、「途上にある」という彼の根本態度を成立させているのである。

第2部ではヤスパースあるいはヤスパース哲学とキリスト教との近さと遠さの関係が従来の研究では見られなかった視点から非常に興味深い仕方で論じられるが、根本の論点は、哲学的信仰からのキリスト教信仰の排他的絶対性の批判、端的に言えば「神の局在化」の批判であると言える。この部で特に審査員の関心を引いたのは、ヤスパースがナチズムの時代にそれまで無関心であった聖書とキリスト教に接近したという「聖書的転回」が生じたという主張である。これは今まで示されたことのない見解である。また三人の神学者ティリッヒ、ブルトマン、ブーリとヤスパースとの対比も興味深く、第2部はヤスパース研究者を刺激する内容を多く含んでいる。

第3部では近年のヤスパースの精神病理学再評価の動向を踏まえつつ、彼の精神医学と哲学のうちに相通じる絶対化批判の根本態度があることが確認される。ここではまずヤスパースの精神医学の方法論的性格が主題的に問われる。たとえば心的機能を脳の特定位に還元する「心的局在論」あるいは「脳神話」に典型的に見られるような「全体認識」に対置される「方法論的認識論」がその精神医学の心髄であることが示される。ヤスパースの哲学も、より深化発展した方法論的態度によって支えられており、その点での内的連関は明らかである。そしてこの部で特に注目されるべきは、後期ヤスパースにおける「理性」の強調と『精神病理学総論』の革新的新版との間には内実上の並行関係があり、それがまさに方法論的根本態度の自覚的深まりによるということ、他の諸研究をも踏まえて文献的裏づけをもって示したことである。これは研究者たちによって必ずしも共有されていない認識であり、その意味で重要な論究である。

以上の論述を通して、ヤスパースの思索を貫く明確な姿勢が確認される。

このように岡田氏はヤスパースの思惟全体における一貫した根本態度を際立たせるのだが、その論述の仕方に全く問題がないというわけではない。

まず、論述全体が十分な有機的連関をもってなされているとは言えないという指摘が審査員全員からなされた。個々の部は独立した論文の性格が強ク(特に第2部は完成度が高い)、全体として論文集のような印象を与える面がある。また各部の配列に関しても、むしろ第3部の内容を初めに論じて議論を引き締め、しかるのちに他の部の内容を具体的展開として論じた方がよかったのではないかという意見があった。なおさらに、「聖書的転回」、「形式的超越者」、「一性」、「人間存在の共通の根源」等の個別的諸概念についてももう少し詳しい説明がほしい、ヤスパースにおける他の重要な諸テーマが抜けている、という不満が残ることも否めない。

しかしながら、指摘されたいくつかの難点は致命的なものではない。それらは今後の研究によって十分に補われうるものと考えられる。本論文を貫く問題意識は明確であり、それを諸種の文献・研究を踏まえつつ追究し、根拠ある一定の解答と結論に達するその研究姿勢を高く評価したい。総合的に判断して、本論文は博士学位の授与にふさわしい論文である

公開審査会開催日	2014年 4月 19日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		実存哲学	佐藤 眞理人
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	宗教哲学	田島 照久
審査委員	玉川大学文学部・准教授		ドイツ現代哲学	中山 剛史
審査委員				
審査委員				